



Title	諏訪明神縁起の研究 : 諏訪信仰の神話世界 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	間枝, 遼太郎
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15055号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/85410
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Ryotaro_Maeda_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 間 枝 遼 太 郎

学位論文題名

諏訪明神縁起の研究—諏訪信仰の神話世界—

・本論文の観点と方法

中世以降、軍神として広く信仰を集め、武家社会において大きな影響力を有した諏訪大社は、また、御柱祭に代表されるような独特の祭祀・信仰形態から、日本の歴史や文化の解明に関わって注目を集めてきた。

近代に入り、諏訪信仰に関する学術的研究も重ねられてきた。諏訪社の場合、平安時代以前の資料は少なく、主に南北朝時代に成立した縁起書『諏方大明神画詞』（以下『画詞』）をはじめとする中世以降の文献の記述を部分的に利用しつつ、考古学や民俗学なども援用するという手法がとられた。そうして、時に縄文時代にまで遡り、日本列島の信仰の源流にも言及するというような研究が展開されてきたが、そこには、中世以降の資料を古代の研究に安易に利用しすぎるといった問題や、古代の追究に重きが置かれるあまり実際に資料が残る中世以降の研究が十分にはなされないという問題、さらには文献資料の基礎的読解がなおざりにされ不正確になっている部分があるといったさまざまな問題を指摘することができる。

そこで本論文では、中世・近世の諏訪明神縁起について、『画詞』およびそれを再構成して作られた文献である『諏方大明神講式』（以下『講式』）を中心に、成立年代や歴史的な位置付けの問題に注意を払いながらその生成と展開の様子を探ることを目指した。また、縁起の生成と展開を考える上で注目されるのが、『先代旧事本紀』（以下『旧事本紀』）や聖徳太子伝といった、古代の神話や歴史に淵源し、中近世に影響力を持った文献・説話の影響が、『画詞』や『講式』といったテキスト中にしばしば見受けられる点である。本論文はそうした観点から、諏訪明神縁起を、それらの文献等と関わり合いながら生成・展開していくものと位置づけ、その動態と総体を捉え、文学史・思想史の流れの中に位置付けることを試みたものである。

・本論文の内容

第一部「『諏方大明神画詞』の研究」には、『画詞』の諸本論、および『画詞』縁起絵部をめぐる論考が収められる。

第一章「『諏方大明神画詞』諸本考」では、本学異論分全体の基礎的考察として、『画詞』の諸本の系統や書写年代を確認・再検討する。

第二章「『先代旧事本紀』の受容と神話の変奏—神社関連記事の利用をめぐる—」では、『画詞』における諏訪明神をめぐる叙述の中心を為す国譲り神話について考察する。『画詞』の国譲り神話は『旧事本紀』から取り入れられたものだが、特に神社をめぐる京都の神祇官ト部氏の言説・活動と『旧事本紀』の利用に注目し、そのト部氏の関与という点から、『画詞』において国譲り神話がどのように取り入れられ、またそこにはどのような変容が存在したのかを明らかにした。

第三章「『諏方大明神画詞』における神功皇后三韓出兵譚—南北朝時代の諏訪明神縁起—」では、『画詞』において国譲り神話に続いて記される神功皇后三韓出兵譚について考察する。『画詞』が京都の北朝の後光厳天皇や室町幕府と密接に関わりながら作成されたものであることを踏まえ、さらに同じ縁起絵部の田村麻呂高丸討伐譚や前章で見た国譲り神話の内容との関連も確認しつつ、『画詞』の三韓出兵譚が、そして『画詞』縁起絵部全体がどのような諏訪明神の縁起を描き出しているのかを明らかにした。

第一部付論「『先代旧事本紀』における石上神宮の位置付け—フツノミタマ・タケミカツチ同体説

をめぐって一」は、『旧事本紀』そのものの持つ性格を検討する。物部氏の奉じた石上神宮が、『旧事本紀』でどのように位置付けられているかを、タケミカヅチ・フツノミタマの団体説や、神社に関する多数の独自記事の存在から考察し、第一部第二章および第二部第三章での論議を補うものである。

第二部「諏訪明神垂迹譚と聖徳太子伝—〈モリヤ〉の物語をめぐって一」では、国譲り神話とは別に諏訪明神の垂迹を語る縁起譚である、「洩矢」という在地の存在と諏訪明神の争いの物語について、それが聖徳太子伝と関わりながら展開していくさまを検討する。

第一章『諏方大明神画詞』諏方社祭絵第四、六月晦日条考—諏訪明神垂迹譚の基礎的考察—では、議論の前提として、『画詞』祭絵部所載の当該垂迹譚の基本的な解釈が先行研究の間で定まっていないことを指摘し、改めて基礎的読解を試みた。その上で、従来ほぼ同一の話として扱われてきた『講式』および『諏訪信重解状』（以下『解状』）所載の類話と『画詞』の垂迹譚との差異をそれぞれ示した。

第二章「諏訪明神縁起における聖徳太子伝の受容と展開—『諏方大明神講式』を中心に—」では、「洩矢」と諏訪明神の争いの物語が、中世に流布した聖徳太子伝の影響を受けて物部守屋と諏訪明神の争いへと変容していく様子を、特に中世の京都で作られた仏教的な儀礼テキストである『講式』に注目して明らかにする。また、諏訪上社の社家に伝わった『諏訪上社物忌令』について、そこに記される諏訪明神縁起が『講式』より遅く成立したものであること、『講式』の言説が京都から諏訪地方にも伝わっていたことを指摘した。

第三章「諏訪信仰における聖徳太子伝の影響—物部守屋に注目して—」では、かつては鎌倉時代の成立とされた『解状』が、実際は『講式』の影響を受けて成立したものであったこと、諏訪上社の有力社家である神長家（守矢／守屋家）が物部守屋の後裔とされるようになること、また反対に上社最高位の社家である大祝家が物部守屋を討伐する氏祖伝承を持つようになることなどを確認した。

第三部「近世の諏訪明神縁起と国譲り神話」では、これまであまり注目されてこなかった近世の諏訪明神の縁起を取り上げ、近世の諏訪社・諏訪地方における神話の受容と生成を多角的に捉えることを試みた。

第一章「国譲り神話と近世諏訪明神縁起—「健御名刀命」の神話をめぐって一」では、室町時代の吉田兼俱の『日本書紀』注釈によって生成された〈タケミナカタを「健御名刀命」と呼称する独特な国譲り神話〉が、林羅山の『本朝神社考』を経て、近世の諏訪社、特に諏訪上社の主要な縁起譚として取り込まれ、またそこからさらに変容してゆく様子を、『諏訪上社社例記』という上社の公式的縁起や略縁起類によって考察した。

第二章『諏方大明神画詞』の受容史—国譲り神話の扱いを中心に—では、『画詞』の諏訪地方における受容の様子を、主に国譲り神話をめぐる影響関係を手掛かりとして確認する。『画詞』が諏訪地方で盛んに受容・利用されるようになるのが近世に入ってからであったことや、『画詞』が国学者に受容されることで生まれた、前章で見たものとは異なるもう一つの縁起の受容・展開の流れを示した。

第三部付論「吉田兼俱の『日本書紀』注釈における神典観と『先代旧事本紀』」は、室町時代の吉田兼俱の『日本書紀』の講義においてなされた注釈の中での『旧事本紀』の位置付けと利用の方法を再検討する。第三部第一章を補足する論となるものである。

最後に付録として、『画詞』の現存写本の中で二番目に古い本である叡山文庫天海蔵本を紹介する「叡山文庫天海蔵『諏訪大明神画詞』解題・翻刻」を収録する。当該写本は特に第一部第一章の『画詞』諸本論における考察の中で重要な位置を占める資料である。